

これが現象学だ

谷徹

講談社現代新書 1635 (2002)

I. 現象学の誕生

30 自然/世界は「数学」の言語で書かれている。しかし、このときから数学的に捉えられた世界(理念化された世界)が「真の世界」「客観的な世界」だと思込まれ、それとともに直接経験の世界(生活世界)は「見かけの世界」「主観的世界」だと見なされおおい隠されてしまうという逆説も生じた。

31 フッサールはガリレオを「発見の天才」であるとともに「覆い隠す天才」であるともいっている。

[C] ここには根本的認識間違いがあるのではないか。数学の言語で書かれている」というのは、言語的に写そうとすれば数学しかない、ということであって、それでほんとうに写せるとは数学者は考えていないと思われる。「言語を越えている」ということが重要な真の意味なのだ。それは言語でおおい隠されてしまう。直接経験できる生活世界の方が本当だ、直接的だという主張は a priori に認められるべきではないのである。われわれが直観的に見えていると思う世界はすでに構成された世界である。(いわゆる binding の話を考えるべきである)。

38 マッハは科学には「唯一の基礎」があり、それは「経験」であり、より正確には感覚」だと言うのである。

フッサールの「現象学」はマッハの「現象学」と無関係ではない。しかし、実際には、その当時いろいろな人が使っていた言葉である。

39 直接経験を中途半端に捉えてしまうと(典型的にはマッハがそうだったが)、数学や論理学を正しく基礎づけることはできない。

41 ウィトゲンシュタインは論理と倫理は、超越論的なものと認めていたようである。これらは、経験を可能にするものであるとともに、経験から独立なものだ(これが本来の「アプリアリ」である)と認めていたようである。

[C] つまり、a priori とは生物学的に生きものに組みこまれた外世界のことなのだ。

42 論理実証主義者たちは、実証主義と論理学を(いわば横につないで)統合しようとした。経験科学的に実証可能なものだけを有意味と見なした(科学主義)。

43 フッサールは『論理学研究』で論理的なものがアプリアリであることを認めた。フレーゲのように論理を第三領分に隔離せず経験で基礎づけようとした。経験を基礎に据える一九世紀末のウィーン的な経験主義があったのだろう。言語(論理)は、経験に対して派生的と見なされる。

いささか極端に言えば、二〇世紀の哲学潮流は皆一九世紀末のウィーンで揺籃期を送ったのである。

44 最近、分析哲学と現象学の関係を考え直そうとする機運が出てきている。これは、内容的に言えば「心理(学)」と「論理(学)」と「経験(論)」の関係を考え直すことになるだろう。

47 マッハの左目の見た光景。フッサールはこうした主観的光景こそが根源的だと考え、派生的な「客観性」をこの光景にまで引き戻さねばならない(還元せねばならない)と

- 考えた。
49 表象の外部に当該の対象が実存していると信じるような(自然的態度の)傾向にストップをかけねばならない。エポケーである。
- 50 なぜ超越論的と言われるか?
その最大の理由は、表象の外部になにかが「存在する」と言うことは、そのなにかが表象を「超越している」と言うことを意味するからである。—中略—そのような存在=超越しているものを、マッハ的光景(表象)の外に出て、確認できると思い込んでしまう。この思い込みをフッサールは「超越化的思考作用」とか「超越化的解釈」と呼んでいる。あるいは、後にメルロ=ポンティは「上空飛行的思考」と呼ぶ。
しかし、私たちはマッハ的光景の外には出られない、存在=超越は、私たちがマッハ的光景の内部で構成したもの、いまま構成し続けているものである。
52 このように還元された光景を「超越論的主観性」とよぶ。
[C] 要するに自然的態度は self-consistent にできるのだ。
- 55 フッサールはマッハに批判的だった。なぜか。それは、フッサールはこの直接経験の領野において見えているものに一つの決定的な特徴を発見したのだが、マッハはそれを見落としていたからである。それこそ、フッサールが「志向性」と呼ぶところのものである。
- 56 私たちは「現出」の感覚・体験を突破して、その向こうに「現出者」を知覚・経験しているのである¹。
58 現出の多様の向こうに現出者の同一性を見ている。「客観の同一性の表象は媒介されている」。直接経験における現出者の知覚が、実は直接的でないのである。
- 60 現象学は現象についての学問であるが、「現象」の語は「諸現出」と「現出者」の二義性を孕む。「現象」という語は、現出することと現出者との間の本質的な相関関係のおかげで二義的である」。
61 現象学は、たとえば、実体(本体)と現象(仮象)と言った意味での現象を扱う学問ではない。
- 62 「現出」の感覚・体験を突破して、その向こうに「現出者」を知覚・経験しているのであるが、この媒介・突破の働きが「志向性」である。それゆえ、直接経験は「志向的体験」と言い換えられる。これをさらに「意識」という概念でも表現する。
一般的には、「意識は何ものかについての意識である」と言われる。しかし、この「についての」が、諸現出の媒介・突破の関係を意味していることを忘れると、実につまらなくなる。
- 63 意識は、自分がテニスを見ているということも非主題的に意識している。こういう意味で意識とは、大雑把には、(対象の意識であるとともに)緩やかな自己意識でもあると言えるだろう。
- 68 無前提性。現象学は基礎の基礎であるならこうなるしかない。

II. 現象学の学問論

- 73 心理主義: 人間の心理構造や心理作用に規則性によって数学や論理学を基礎づけようとする主義。

¹ 平行四辺形からもとの長方形を知覚するようなこと。

そうすると生物それぞれに数学や論理学があることになるのが難点。

75 1900年の「論理学研究I」(プロレゴメナ)以後のフッサールは、数学や論理学がア
プリオリな学問であることを認める。その基礎は直接経験=志向的体験にある。その
本性がどういうものか、が問題なのである。

77 カントのアプリオリは「そもそもはじめからわれわれのうちに与えられている」とい
う意味である。論理学が私たちの主観性にあらかじめ備え付けられているから「アプ
リオリ」なのである。

フッサールは、主観性に「あらかじめ」備え付けられているという意味での「アプ
リオリ」を認めない。だから、フッサールは「カントは現象学的アプリオリを知らなかつ
た」とも言う。フッサールの現象学的アプリオリは、主観性に備え付けられた(一種
の心理主義的な)認識装置とは無関係である。それは、時制変化しない「ある」がも
つ特性である。アプリオリは心理主義的な概念ではなく「ある」=「存在」にかかわ
るという意味で、存在論的な概念である。

[C] この二つの間の対立を止揚するものが進化論的立場であるに違いない。

81 フッサールから見るとカントのように一種の生得的な装置を設定するのは、一種の心
理主義に他ならない。

アプリオリは経験から抽出される。

85 フッサールにとって、論理学は、それだけでなく、諸学問の基礎学であり、これは、
諸学問が学問であることができるための条件を示す役割を負う。総じて学問は無意味
であってはならないから、論理学は「無意味」を排除するものでなければならない。
(「無意味」とはなにか。論理判断の対象にもならないような限度の結合のことであ
る。)

93 普遍妥当なアプリオリの「背後」あるいは「下」に「最も困難な諸問題」が隠れてい
る。アプリオリな論理学そのものの基礎(直接経験=志向的体験)を発掘すること。

96 フッサールは最高類を領域とよぶ。物質的自然、生命的自然、精神世界。

98 「人格主義的態度」が「自然的態度」に先行する。私たちが最初に経験するのは「物
質的な物」ではなく「道具」である。たとえば人間を見る時、はじめに「あなた」が
あり、次第により抽象的概念としてヒトが出てくる。

かくして、精神世界および人格主義的態度の先行性が認められることになる。物理的
物や心理物理的生物は、派生的に経験されるにすぎない。こうした人格主義的態度の
精神世界は「生活世界」と呼ばれる。生活世界こそが根源的であり、物質的自然や生
命的自然は派生的である。

[C] これは本当であろうか。根源的な物は抽象的なのではないか。

100 生活世界(「生きられる世界」メルロ=ポンティ)は20世紀における最も実り豊かな
造語(ハーバーマス)。

111 最晩年のフッサールは、アプリオリな「本質」さえも、ある最も資源的な「事実」に
依拠することを認めるようになった。この事実は「原事実」と呼ばれる。志向的体験
そのものを原事実は支えているので原事実なしにはアプリオリな本質さえ不可能にな
る。

112 フッサールは「私が存在する(あるいは経験の中心化が生じている)」「流れつつ立
ち止まる現在が生じている(あるいは世界がある安定性をもって開かれている)」「他
者が存在する」ということを原事実として認めている。

- 114 原事実を扱う学問が形而上学である。
- 115 要約すると、フッサールは一種の対応説的な真理と十全的明証性²を出発点にしつつ、その後、必当的明証性を重視するようになった³。最晩年には、こうした考え方の枠組み全体を変更する可能性に直面した⁴。
- 116 カント要約: 問問背の哲学では(主観的な)認識は(客観的な)対象に従うと見なされていた。ところが、カントは逆に、周知の「コペルニクス的転回」によって、(客観的な)対象の方が(主観的な)認識に従うとみなした。つまり、(客観的な)対象の認識を可能にする条件は、じつは(主観的な)認識装置に含まれている条件だとみなすのである。
- 119 フッサールの批判するところでは、ユークリッド幾何学などは志向的体験から成立する、あるいは「生活世界」的経験から成立するのだが、カントはいわばこうした先客観的な時空を知らなかったので、ユークリッド気化のような客観的時空を前提としておき(他の学問の結果をもちこみ)それに対応するような感性の形式が主観性にア prioriに備わっているとした。これは根源的な物を見落とした本末転倒の見方である。
- 121 カント的に見れば、主観性には「超越論的統覚の自我」もア prioriに備わっている。これが多種多様な表象を統一する。これがなければ昨日の表象と今日の表象が統一されない。フッサールはこれを認めざる得なくなる。
- 125 フッサールは同一化機能・中心か機能として機能としての自我が登場する。しかし、このカントが主観性にア prioriに備わっているとみなした自我も、フッサールでは、やはり志向的体験から生じてくるのである。彼は、これらが直接経験の先行段階から形成されると見る。カントはこの受動的な段階を見落としている。この「受動的総合」の分析が発生的現象学である。
- 130 III. 直接経験とは何か
表現は、その「意味」を突破して(媒介して)「対象」を指し示す。この関係は諸現出と現出者の関係と並行している。諸現出と一体的に捉えられた限りでの現出者のことをノエマという。そこでこの意味を「ノエマの意味」という。
- 133 イデーナでは現出は射影とも呼ばれる。ノエマの意味はひとつの「基体」に収斂している。だからこそある一つのものの多様な現出とみなされるのである。ノエマの意味を全くまとわない基体はない。しかしあえて現出者からノエマの意味をはぎ取ると形式的に極のようなものがのこる。これはXとも呼ばれる。一つのノエマはノエマの意味が(ひとつの)基体に収斂させられることによって、構成されている。この構成を遂行しているのは、直接経験=志向的体験の働きであり意識の働きである。ノエマと対

² 対応説的立場で言語の意味が真理でありうるためには

(i) 存在論的条件を満たす: 実在的存在をもつものに対応するか理念的な存在をもつものに対応する。

(ii) 認識論的条件を満たす: 言語的判断の意味としての思念されている物と与えられた物それ自体との完全一致。

ここで完全一致とは「十全的明証性」である。

³ 十全的明証性は不可能である。「現出」そのものについてはフッサールはそうだと考えていたが、だがいつも現出は突破されてしまっているから反省なしには捉えられない。つまり直接的ではないのだ。そこで、フッサールはア prioriのものがもつ明証性「必当的明証性」で学問的認識を確立しようとした。

⁴ ところが、p111に書いてあるように、ア prioriな「本質」さえも、ある最も資源的な「事実」に依拠する。

比される時この意識の働きはノエシスと呼ばれる。ノエシスとノエマはいつも一体である。ノエシスのないノエマとかノエマのないノエシスなどは、ない。

141 基体を抽出されたノエマにはノエマ的意味そのものが残っている。これはノエマの「何」を規定する。

142 当のものにとって必要不可欠な意味は、「本質」と呼ばれる。私たちはそれを直観して
る。

153 ノエマの存在には3種類がある。実在的、中立的および理念的な存在である。これらは時間との関係で定義される。客観的時間の中に位置づけうるものが実在的、擬似時間の中に位置づけうるものが中立的、時間と無関係（あるいはどの時間位置にも現れうるもの）が理念的である。

159 存在の構成とは、ノエマを時間との関係でカテゴライズすることである。そこで時間が構成されていないと存在は構成できない。時間の構成のためにフッサールは記憶を持ち出す：新たな現出が登場するたびに、それ以前の現出は、原印象からより遠い把持の方向へ向かって押しやられていく。つまり、時間順序はすでに given なのでありフッサールの論法は破綻している。

166 現在の意識では、把持はその不可欠な契機であり、それ自体、一種の志向性である。把持は把持自身を把持しているのである。言い換えれば、把持は自己関係的・自己意識的な構造をもつ。

167 意識（志向的体験）は、もろもろの外的把持＝横の志向性をつうじてひとつの（同一な）現出者を取りまとめるのと同様にもろもろの内的把持＝縦の志向性をつうじておのれ自身を非主題的に取りまとめる。自我は志向性の働きそのものを取りまとめたから、通常の現出者とは全く身分が違うがしかし、自我は現出者と同時に成立する。

空間や身体も志向的体験にもとづいて構成されていくと考える。その説明が p176 まで。

[C] 総じて根本的に忘れられていることは生得的に、あるいは系統発生的に given とされていることである。

IV. 世界の発生と現象学

182 1920年代のフッサールは、ノエマ的意味や時間・空間の構成や自我の構成を、さらに「発生」という観点から分析するようになる。「発生的現象学」である。

[C] 根本的欠陥は系統発生と個体発生との区別の欠落である。

184 現象学とゲシュタルト心理学：フッサールの原連合はゲシュタルトに近い。現代ではゲシュタルト心理学を下敷きにしたアフォーダンス理論⁵と現象学に近い。

⁵ [Wikipedia] アフォーダンス (affordance) とは、環境が動物に対して与える「意味」のことである。アメリカの知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンによる造語であり、生態光学、生態心理学の基底的概念である。「与える、提供する」という意味の英語 afford から造った。アフォーダンスは、動物（有機体）に対する「刺激」という従来の知覚心理学の概念とは異なり、環境に実在する動物（有機体）がその生活する環境を探索することによって獲得することができる意味／価値であると定義される。アフォーダンスの概念の起源はゲシュタルト心理学者クルト・コフカの要求特性 (demand character) の概念、あるいは同じゲシュタルト心理学者クルト・レヴィンの誘発特性 (invitation character) ないし誘発性 (valence) の概念にあるとギブソンは自ら述べている。

IT 的使い方としては [http://usability.ueyesdesign.co.jp/glossary_01.html] , Norman がインター

186 ゲシュタルトのようなものが際立って(触発して)くると、注視がそれに向かう。ここから現象学は独自の志向性分析にすすむ。ノエマ的意味の「規定」(たとえば、色、形)が見出されるとともに、それらの意味が収斂する「基体」が分化していく。つまり、志向性は、突破されるべき諸現出(ノエマ的意味の諸規定)と、これらの諸現出を付着させる基体とを、分化させるのである。このことを出発点にして、後に、主語(基体)と術語(意味)といった論理学的カテゴリーが成立していく。

さらに、解明は進む。対象の外部との関係(外部地平との関係)でさらなる意味規定を受けていく。意味はその当のものだけで決まるわけではなく意味地平にもよる。解釈学との共通性がある。

190 この後様相の発生が説明され、論理学の発生の説明が紹介されている。これを「基礎
194 付け主義⁶」と切り捨てる人もいるが内容を知らないからであろう。

195 世界は、個々のノエマの外部地平であった。つまり世界は解明された事象の外である
197 から完全な規定はできない。世界は意味的にはノエマと連係しているが、意味を収斂
させる基体を持たない。

199 煎じつめれば、存在は時空的に位置づけられるものであり、それはそういう
200 物ではない。

「存在措定」とは、対象に「存在する」と認めることであり、直接経験において対象を時間の中に内属させることである。対象の「存在」は意識がこのような「存在措定」を遂行することによって成立する。ところが世界の場合はそうではない。「存在措定」は対象を世界地平のなかに内属させることだから、それ自体世界地平を前提とする。したがって、世界は対象ではない。

構成されるのでは
ないか

こうしてフッサールはさらに先行するものを認めなくてはならなくなった。

V. 時間と空間の原構造

204 世界の存在は意識の存在措定によるものではない。意識の働きに先立って世界は存在
するのである。これを発見するとき、現象学は新たに始原する。

205 世界の存在は、その始原においては、意識の働き(志向性)そのものに先立って
いる。それは受動性よりももっと受動的に与えられる。フッサールはこうした次元を
「原受動性」と呼んでいる。

207 フッサールは時空をも原受動性から考え直した。原感情や原本能が考えられた。晩年
のフッサールはフロイト的な無意識を現象学的に解釈し直そうとしていたようである。

211 一般に「原…」というものは高次の構成で隠蔽されてしまう。新脳と旧脳の関係

フェイスの用語として定着させた。物体の持つ属性(形、色、材質、etc.)が、物体自身をどう取り扱ったら良いかについてのメッセージをユーザに対して発している、とする考えである。「アフォードする」などという使い方をする。

⁶ [Wikipedia] 認識論においては、信念が正当化されるのは基本的な信念によって基礎付けられることによってである、という考え方を指す。命題の確かさは、絶対確実な疑い得ない根拠から正当化の連鎖によって派生的に与えられるものであるとみなすことである。しかし、実際に基礎として働くような信念は絶対確実からはほど遠く、あるいは絶対確実だと思われるような信念は非常に無内容なトートロジーであって他の信念の基礎として働かない。こうして基礎づけ主義は時代遅れと見なされるようになり、近年では**整合説が勢力を持つようになってきた**。

註: 真理の整合説(Coherence Theory of Truth): ある命題が真であるかどうかは、その命題と他の命題群との整合性によって決まるとする立場。

[C] 進化現象学では、判断の基準を生きのびることにおく。真理は撰択に有効である限りにおいて真理である。基礎付けは実践的に与えられる。

- 212 わせる。
なにかが「明証的」になると、その構成は、主題的なものの背後にその可能性の条件を深く沈み込ませる。
ガリレオ以後の科学的な高次の世界の構成は、低次の生活世界を覆い隠していた。そして、このような事態の最根源にあるのが原受動的・原事実的な次元である。
- 214 覆い隠された原初の世界の先存在が、構成段階の上昇の際に、完全に失われると言うことが起きてしまったら、大きな「危機」を抱え込むことになるのではないか。
- 217 自我が成立しているということは、認めざるを得ない。ただし、このことに必然的理由はない。ただ「事実」としてそうになっている、というだけである。私が存在するということとは原事実である。しかし、その私を存在させるような時間/世界が先存在するということも、(最根源的な)「原事実」である。

要するに、フッサールは無前提的厳密学をめざしその不可能性に達着したのである。それゆえ最晩年には原事実の形而上学をめざすことになった。

この本は以下の章ともう一つの章よりなるが、根源的な問をもつならば、もう読む必要はない。

VI. 他者の現象学